

濃密な時間を伝え他者の美意識を甦らせる人  
浅山泰美エッセイ集

『京都 桜の縁し』に寄せて

鈴木比佐雄

浅山泰美さんは、詩、小説、短歌、エッセイ、写真、ライアーの六種類の表現者の顔を持つている。浅山さんにとっては、どの表現も京都の街に息づく歴史・文化的な時間に促された切実な表現方法なのだろう。過去の七冊の詩集、一冊の小説集、一冊の写真エッセイ集、前回の『京都 銀月アパートの桜』と今回の『京都 桜の縁し』である写真・短歌を入れたエッセイ集、詩の朗読とライアー演奏などの表現行為は、浅山さん独自の美意識に貫かれたものだ。その美意識は、商店、喫茶店、レストランなどで過

かには見えてはいないが、本来的には繋がっているはずの過去・現在・未来の重層的な関係であり、そんな根源的な時間を発見し生き抜く行為こそが、「桜の縁し」なのである。その意味で多くの読者にも存在している「縁し」の關係性の力を発見させてくれるきっかけになる本になるかも知れない。

一冊の本の願いは、熱烈な読者の傍らで愛読され続けることだろう。二〇一〇年二月に刊行された『京都 銀月アパートの桜』は、二年が過ぎても多くの人びとに愛されて読み継がれている本だ。新刊の頃には浅山さんと同様にエッセイを書く女性詩人たちから多くの反響があり、自分も浅山さんのようなエッセイ集を出したいという問い合わせがあった。その人たちの中から数名のエッセイ集が実際に現実化した。また

ごした時間やそこで出会った人びとの「縁し」として語られている。浅山さんが過去を再現しようとする記憶力は、美しいものを甦らせて現在を豊かに生きたいという、過去を未来に反復させる力を濃密に感じさせてくれる。浅山さんの語りたいものは、京都の街で暮らす家族・友人・知人や他の人びとの美意識であるのだが、その美意識は京都を越えて、人が生きる時に必要な人間としての誇りや喜びとを分かち合えるという共有感覚なのかもしれない。その意味で浅山さんの言葉は、人が生きるべき本来的な手ざわりのある時間、人びとが交流し魂を響き合わず時間感覚などを、一つひとつ確かめながら、古びた時間を紐解いて、新たな時間に仕立てる創造的瞬間を「縁し」として成立させる表現行為なのだろう。浅山さんにとって、いまだ明ら

一年後の二〇一一年の春には、評論家の松岡正剛さんが京都新聞で「桜の時期になると何度も味読したくなる本である」という主旨の書評をしてくれた。同じ頃には「NHKラジオ深夜便」の全国放送で二編のエッセイを女性アナウンサーが十五分ほど朗読してくれ全国的にも大きな反響があった。また一般読者の中でも沢山の本を購入してくれて多くの人びとに届けてくださる方たちもいた。その意味で『京都 銀月アパートの桜』は、浅山さんや出版社などの手を離れて、多くの読者の心に住み着き始めて、個人の静謐な時間に内面の対話を促す本になっているのだろう。

今回の新しいエッセイ集『京都 桜の縁し』は、IV章四十二編のエッセイから成り立っている。I章の「木精の書翰」十七編は、十年前に

刊行されている本だが、このエッセイは京都の街の魅力を解き明かした古典的な魅力を持って、私も時々愛読していた大切な本だった。その各エッセイの初めに今回は「静かなる店の奥にて待ち合はす この世の友と姿なき友」などの短歌が新たに加えられた。冒頭の「静かな店」はその短歌のように、一人物思いにふけることができる京都の喫茶店のゆったりした魅力を語ったものだ。クラシック音楽を聴きながらゆったりと濃密な時間を過ごしていたころの雰囲気がとてもよく書き記されている。また父や母、亡くなった親族や友人と過ごした掛け替えない時間が心の遺産のように淡々と語られている。II章「猫の往生」十編は、家族同然だった猫との交流、亡くなった友人知人との陰影のある劇的な時間が描かれていて、それら信念ある生き

方をした人びとの素顔を照らし出している。III章「アルトライアーの響き」八編は、ライアーとの出会いやその魅力とライアー演奏活動の報告などの他に、沖繩などの旅行記がまとめられている。IV章「京都 桜の縁し」七編は、前回の『京都 銀月ア・パートの桜』刊行後に生まれた「桜の縁し」が書かれている。一冊の本が多くなると人びとをつなげる働きをしていたことは、きつと眼に見えない何かを感じ取らせる力が浅山さんの本の中に備わっていることの証だろう。多くの桜を愛する人びとにも、また東日本大震災・原発事故以後に困難な状況が続く人びとにも、この本を読んでもらいたい。そして「桜の縁し」がもっと広がり、困難な時間が克服されて、豊かな時間が反復されることを願いたい。

浅山泰美エッセイ集 『京都 桜の縁し』 栞解説文  
鈴木比佐雄

コールサクク社  
2012